

文語歌曲「七里ヶ濱の哀歌」

谷田貝常夫

作詞 三角錫子 作曲 J・インガルス

一、眞白き富士の嶺、緑の江の島／仰ぎ見るも、捧げまつる、胸と心
今は涙歸らぬ十二のみたまに／捧げまつる、胸と心

*し・・・「雄々しき」形容詞連體形

二、ボートは沈みぬ、千尋の海原／風も浪も小さき腕かひなに
力も盡き果て、呼ぶ名は父母／恨みは深し、七里ヶ濱邊

*し・・・「深し」形容詞終止形

三、み雪は咽むせびぬ、風さへ騒さわぎて／月も星も、影を潜め
みたまよ何處に迷ひておはすか／歸れ早く、母の胸に

四、みそらにかがやく、朝日のみ光／暗やみに沈む、親の心

黄金も寶も、何にし集めん／神よ早く、我も召せよ。

*し・・・強めの助詞

五、雲間に昇りし、昨日の月影／今は見えぬ、人の姿

*し・・・過去の助動詞

悲しさあまりて、寝られぬ枕に／響く波の、音も高し

*し・・・「高し」形容詞終止形

六、歸らぬ浪路に、友呼ぶ千鳥に／我も戀し、失せし人よ

*し・・・「戀し」形容詞終止形、「失せし」形容詞終止形

盡きせぬ恨みに、泣くねは共々／今日も明日も、かくてとはに

一般には「眞白き富士の根」と呼ばれるこの歌、明治の末の四十三年に起きたる「ボート遭難事故」を主題としてをり、當然追悼の心より讀まれたるも、作詞家の、日頃より慈しみをりたる生徒達への思ひ入れの強調されたる歌なり。八八六六・八八六六を一聯とせる音數にし、死を聯想させる「し」音を多用せり。

天氣晴朗なる朝、逗子開成中學の生徒を主にせる生徒等十二人、三浦半島よりボート漕ぎ出だして江ノ島に行き、天候急變せる中、逗子に戻らんとして七里ヶ濱沖にて顛覆遭難したり。逗子開成校、横須賀軍港に近きこともありて、海軍軍人の縁深く、このボートも軍艦より拂ひ下げられたるカッターなる由。最後に引揚げらるるは、中學生の兄が小學生の弟を抱き離れざる二體なれば、その涙そそれる姿、記念碑となりたり。

この歌、元はアメリカ白人の靈歌なれば、讚美歌集に組入れられて人々にもて囃されたる曲なり。それが日本にては『夢の外ほか』なる題名にて譯詩されたるものを、三角錫子がこの事件にあてはめて新たなる詩とせるものなり。

後大正時代になりて演歌師が、元は「へ長調」なるものを日本人好みの短音階的なる歌として、一段と人口に膾炙することなれり。ただ筆者の見解よりせば、「七里ヶ濱」なる風光を舞臺とせるが世に

受入れられたる一つの大きな要因ならむとす。既に江戸時代、漢詩人菅茶山、瀬戸内の風光讚美の詩多く作れど、江戸に出でたる歸りにこの地に立寄り、その江の島、富士の光景に、鞆の浦等よりは勝れりと讚嘆の詩作る。未だ江の島に至れる橋もなき世に、着飾れる女人多数江の島に向ふ様浮世繪などにも描かれ、歌舞伎青砥稿花紅彩画、通稱「白波五人男」の辨天小僧菊之助が台詞「濱の眞砂と五右衛門が、歌に残した盗つ人の、種は盡きねえ七里ヶ濱」は、江戸以來の庶民に「七里ヶ濱」のイメージを植付けた。病氣療養の地としても定評ありて「聖テレジア七里ヶ濱療養所」ほか、多くのそがための別荘多かりし。さらには昭和初年、露西亞から亡命せるプリマバレリーナ、エリアナ・パヴロワ、七里ヶ濱にバレエスクールを設け、その洋館建ては今にいたるまで風光の一部たり。更に大戦末期、哲學者西田幾太郎博士この地に居住し、七里ヶ濱をよく散歩せり。鎌倉にて没せし博士の歌碑この地にあり。裏の説明文は年來の友人鈴木大拙老師によるものにて、「碑面の歌ノ作者西田幾多郎君ハ、ソノ性海ヲ愛シタノデ末年ハ七里ヶ濱邊ニ居ヲ定メ、波打際ニ沿フテ散策シツ思索シタノデアル」なるこのこと。いづれにせよ、この海岸は「日本の渚百選」の一にて、「眞白き富士の嶺」の歌の廣く受入れられたる根據の一つと言へよう。

今一つ、この歌にまつはれる話は、明治より大正にかけ、葬儀の方式激變せる嚆矢となりたることなり。安田寛氏によると、明治五年に政府「葬儀は神官僧侶が行ふ」としたため、基督者が葬儀を行ふはかなりの冒険にて、墓地はすべて寺にあれば埋葬地にも事缺けり。葬儀が自由化されたるは歐化主義推進されたる明治十八年といふ。かくて基督教會葬者が讚美歌を合唱することとなる。一方信仰を持たざる中江兆民が葬儀は、遺言にもかかはらず、青山墓地會葬場にて、一般會葬者の焼香を受付くる「告別式」にて、いままでに無きことなれば、「奇葬式」とまで呼ばれたり。

「眞白き富士の嶺」がメロディは、アメリカの靈歌が元なる上、作詞の三角錫子は信者にはならぬも、基督教のシンパにて、この歌詞にも讚美歌の影響多大なることは既に指摘多し。ボート遭難の慰靈祭は、逗子開成中學校にて行はれたり。芝増上寺の貫主以下、多くの寺から集りたる住職高僧百名を越え、列席者は四千名を越えたり。祭壇に置かれたるは遺骨ならずして引揚げられたるボート。「大法會」たる衆僧の讀經、焼香の後、開成校全生徒が海軍禮式に則りたる禮をせり。次にあらはれたるは、兄妹校たる鎌倉女學校生徒七十餘名の、揃ひの黒紋付袴姿なり。三角錫子代表として焼香をし、祭壇横のオルガンに向ひ、女子生徒達のそれにつれて謳ひたるがこの哀悼の歌なり。これ「佛教葬と、大衆參加の告別式と、合唱にて死者を讚美する基督教葬とが融合せるはじめてのものなり」と言はる。新しき時代の十二のみたま、心鎮りたらむ。

(平成二十九年二月二十三日受附)